

ラベルワーク技法を活用した コミュニケーション能力育成への取り組み

飯塚 桃子・石橋 照子

概 要

実習カンファレンスの場において、ラベルワーク技法を活用した学生のコミュニケーション能力育成への取り組みを実施した。2005年度後期、2006年度前・後期に精神看護実習を展開した95名の学生の自己評価を、学生の背景となるラベルワーク体験度の違いによって3群に分けその効果を比較した。結果、「聴く力」「自分の傾向を知る」は実習期間内でも高めることが可能であった。しかし「表現する力」については、短期間での習得は難しく、長期的なトレーニングが必要であると考えられた。今後は、実習カンファレンスだけでなく、意図的な講義への導入やその繰り返し、他実習との連携など、継続したトレーニングを実施していける方法を検討していく必要がある。

キーワード：ラベルワーク技法、コミュニケーション能力、実習カンファレンス、看護学生

I. は じ め に

看護基礎教育における精神看護実習では、日々の患者との関わりについて、プロセスレコードなどを用いた専門的コミュニケーション能力の指導を行っている。しかし、学生の記録や報告、会話をしていく中において、学生の「伝える」「聴く」「考えをまとめる」というコミュニケーションにおける基本的な部分について問題意識を感じた。そして、専門的なコミュニケーション能力だけでなく、コミュニケーションの基本的な「伝える」「聴く」「考えをまとめる」能力の育成が必要ではないかと考えた。そこで、2005年度後期から、実習カンファレンスにラベルワーク技法を導入している。そして、実習カンファレンスの場を、学生のコミュニケーション能力育成トレーニングの場として活用する取り組みを行っている。

ラベルワークとは、参画理論の権威者である林が、学生参画を進める方法論の一つとして開発した、「人間交流の知的活動、とりわけ知識の発信・交流および、知的生産のための図解思

考の道具（媒体）としてラベルを用いる理論と技術の体系」である（林，1994，2002，2004）。

本研究では、コミュニケーション能力でも特に基本とされる「聴く力」「考えをまとめる力」「伝える力」に焦点を当てた。そして、2005年度後期、2006年度前期、2006年度後期の約1年半の期間にわたって取り組んできた成果を、学生の背景による違いによって3群に分け、学生の自己評価からその効果を比較することを目的とした。

II. 研 究 方 法

1. 対象

2005年度後期から2006年度後期のまでの期間に、精神看護実習を行った3年次生の学生114名を対象とした。そのうち、研究の主旨等について説明し、同意の得られた学生である。

2. 対象者の背景

学生の、ラベルワークに関する経験など背景の違いによって、2005年度後期、2006年度前期、2006年度後期をそれぞれ、「初めての体験」、「講義の体験」、「講義と実習の体験」とした。

「初めての体験」群は、2005年度後期に実習した学生35名であり、今回の実習で初めてラベルワークを知り、体験した学生である。「講義の体験」群は、2006年度前期に実習した学生36名であり、実習までの段階において講義等でラベルワークの体験のある学生である。ただし、他領域実習でのラベルワーク体験はない。「講義と実習の体験」群は、2006年度後期に実習した学生43名であり、講義でもラベルワークを体験し、他領域の実習でもラベルワークを取り入れるようになり、講義・実習を併せて複数回のラベルワーク体験のある学生である。

3. 調査方法

無記名自記式による調査用紙を、実習最終日の実習カンファレンス終了後に配布し、学生カンファレンスルーム出口付近に設置した回収箱への自主提出とした。

4. 調査内容

コミュニケーション能力について問う調査用紙を独自に作成した。

内容は、①聴く力がついた、②考えをまとめる力がついた、③発言する力がついた、④表現力がついた、⑤意見を聴いて学びを深められた、⑥意見を聴いて視野を広げられた、⑦患者に対する感性が高まった、⑧自分の傾向がわかった、という8項目を設定した。評価方法は、「大変そう思う」「ややそう思う」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」の4段階評価である。

5. 分析方法

得られた学生の自己評価結果を集計し、記述統計にて度数の比較を行った。

「大変そう思う」と「ややそう思う」を併せた、コミュニケーション能力が向上したと評価した学生、「あまりそう思わない」と「全くそう思わない」を併せた、コミュニケーションが向上していないと評価した学生とに分け、向上したと評価した学生における3群の比率を比較した。

6. 倫理的配慮

学生に対して、研究の目的、方法、研究協力への自由意思、成績とは無関係であること、プライバシーの匿名性の保持、データ管理の方法とデータを目的以外に使用しないことについて、口頭と文章をもって説明した。そして、回収箱

への自主提出をもって研究協力への同意とみなした。なお、本研究は島根県立看護短期大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

Ⅲ. カンファレンスの実際

精神看護実習カンファレンスは、実習病院内の学生カンファレンスルームにて行なった。カンファレンスは、実習中（8日間）毎日15:30～16:30までの1時間程度で実施した。実習は常時10～12名で行なうため、ラベルワークはそれを2つの小グループ（5～6名）に分け行なった。

カンファレンスの内容は、実習での受け持ち患者を通した「学び」や「感想」を各自ラベルに書き表し、それを使ってラベル交流を行い小グループそれぞれの考えをまとめて発表した。また、ラベル新聞を作り自分達の考えをグループ同士や病棟スタッフと共有した。

学びや感想だけでなく、「私たちの目指す精神看護」に対する自分達の思考をまとめるラベル図解作りを行った。そして、実習最終日には完成した図解の発表会を行った（石橋、2006）。

Ⅳ. 結 果

対象学生114名のうち、「初めての体験」群は対象者35名中30名の回答があり（回答率85.7%）、そのうち有効回答数は28名であった。「講義の体験」群は対象者36名中30名の回答があり（回答率93.3%）、有効回答数は30名であった。「講義と実習の体験」群は対象者43名中38名の回答があり（回答率88.4%）、有効回答数は37名であった。

調査結果を、各群の調査項目ごとに表1に示す。

3群の調査項目ごとにおける度数分布を見ていくと、3群全てにおいて「大変そう思う」「ややそう思う」側に偏っていた。

「初めての体験」群では、全項目について「大変そう思う」と評価した学生が最も多かった。「講義の体験」群では、「考えをまとめる力がついた」「発言する力がついた」「表現力がついた」については、それぞれ17名（56.7%）、14名

表1 コミュニケーション能力に関する学生の自己評価

調査項目	初めての体験群 (n=28)				講義の体験群 (n=30)				講義と実習の体験群 (n=37)			
	大変そう 思う	ややそう 思う	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	大変そう 思う	ややそう 思う	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	大変そう 思う	ややそう 思う	あまりそう 思わない	全くそう 思わない
聴く力がついた	20	6	2	—	19	11	—	—	21	16	—	—
	92.9%			7.1%	100%			0.0%	100%			0.0%
考えをまとめる力が ついた	18	8	2	—	12	17	1	—	15	22	—	—
	92.9%			7.1%	96.7%			3.3%	100%			0.0%
発言する力がついた	18	9	1	—	13	14	3	—	18	14	2	3
	96.4%			3.6%	90.0%			10.0%	86.5%			13.5%
表現力がついた	18	6	4	—	13	13	4	—	13	18	5	1
	85.7%			14.3%	86.7%			13.3%	83.8%			16.2%
意見を聴いて学びを 深められた	20	8	—	—	21	9	—	—	26	11	—	—
	100%			0.0%	100%			0.0%	100%			0.0%
意見を聴いて視野を 広げられた	23	4	—	—	23	6	1	—	29	8	—	—
	96.4%			3.6%	96.7%			3.3%	100%			0.0%
患者に対する感性が 高まった	21	6	1	0	20	9	1	—	30	5	2	—
	96.4%			3.6%	96.7%			3.3%	94.6%			5.4%
自分の傾向がわかっ た	17	7	4	0	15	13	2	—	22	15	—	—
	85.7%			14.3%	93.3%			6.7%	100%			0.0%

初めての体験群：2005年度前期に実習した、初めてラベルワークを体験した学生

講義の体験群：2006年度前期に実習した、実習までの段階において講義等でラベルワーク体験のある学生

講義と実習の体験群：2006年度後期に実習した、講義・実習を併せて複数回のラベルワーク体験のある学生

■：「大変そう思う」「ややそう思う」を併せた、コミュニケーション能力が向上したと評価した学生

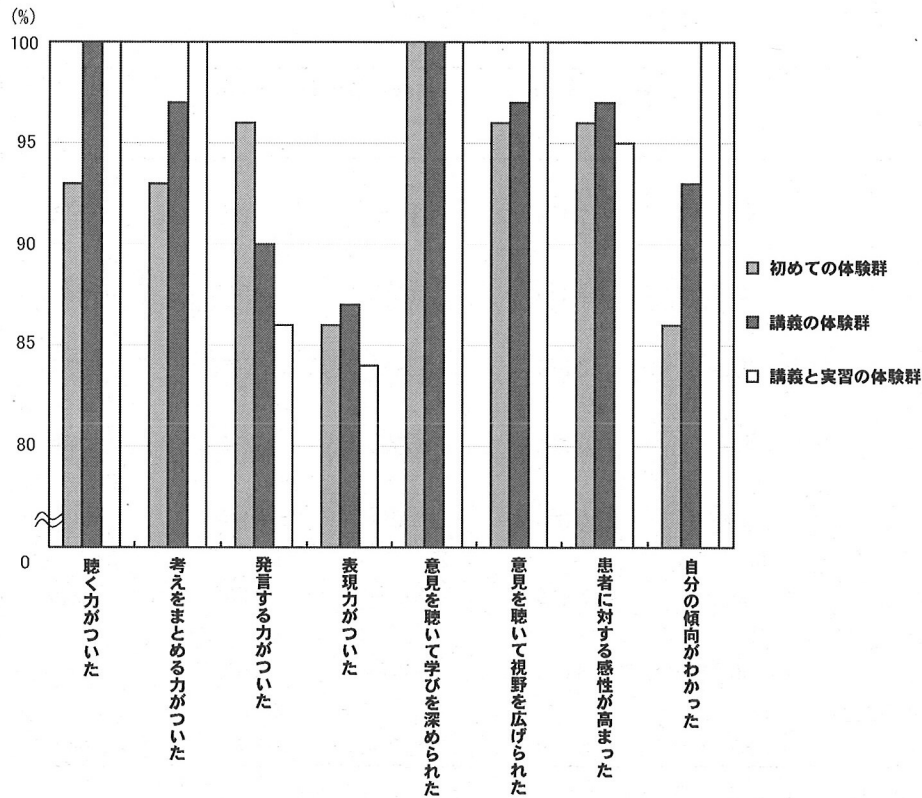
■：「あまりそう思わない」「全くそう思わない」を併せた、コミュニケーション能力が向上していないと評価した学生

(46.7%)、13名 (43.3%) と「ややそう思う」の割合が多く、それ以外の項目については「大変そう思う」が多かった。「講義と実習の体験」群では、「考えをまとめる力がついた」「表現力がついた」については、22名 (59.5%)、18名 (48.6%) と「ややそう思う」が最も多く、それ以外の項目については「大変そう思う」が多かった。

次に、4段階評価のうち、「大変そう思う」と「ややそう思う」を併せた、コミュニケーション能力が向上したと評価した学生（以下、向上したと評価した学生とする）と、「あまりそう思わない」「全くそう思わない」を併せた、コミュニケーション能力が向上しなかったと評価した学生とに分けた。それぞれの比率をみると、全ての項目において「初めての体験」群では28名中24名 (85.7%)、「講義の体験」群では30名中26名 (86.7%)、「講義と実習の体験」群では37名中31名 (83.8%) 以上の学生が、コミュニケーション能力が向上したと評価していた。そ

のうち、向上したと評価した学生について、その比率を図1に表し、3群の比較を行った。

「聴く力がついた」については、「講義の体験」と「講義と実習の体験」群が100%なのに対して、「初めての体験」群は26名 (93%) であった。「考えをまとめる力がついた」については、「講義と実習の体験」群、「講義の体験」群、「初めての体験」群の順に37名 (100%)、29名 (97%)、26名 (93%) であった。「発言する力がついた」については、「初めての体験」群、「講義の体験」群、「講義と実習の体験」群の順に、27名 (96%)、27名 (90%)、32名 (86%) であった。「表現力がついた」については、「初めての体験」群24名 (86%)、「講義の体験」群26名 (87%)、「講義と実習の体験」群31名 (84%) と、3群全てが最も低い結果の項目であった。「意見を聞いて学びを深められた」については、3群全てにおいて100%であった。「意見を聴いて視野を広げられた」については、「講義と実習の体験」群37名 (100%)、「初めて



初めての体験群：2005年度前期に実習した、初めてラベルワークを体験した学生

講義の体験群：2006年度前期に実習した、実習までの段階において講義等でラベルワーク体験のある学生

講義と実習の体験群：2006年度後期に実習した、講義・実習を併せて複数回のラベルワーク体験のある学生

図1 コミュニケーション能力が向上したと自己評価した学生の比較

の体験」群・「講義の体験」群それぞれ27名(96%)・29名(97%)であった。「患者に対する感性が高まった」については、3群共に95～97%であった。「自分の傾向がわかった」については、「講義と実習の体験」群37名(100%)、「講義の体験」群28名(93%)、「初めての体験」群24名(86%)となり、3群の間のばらつきが最も大きかった。

3群の比較より、「聴く力がついた」「発言する力がついた」「自分の傾向がわかった」の3つの項目について、他の項目に對しばらつきが大きい結果となった。

V. 考 察

コミュニケーション能力について問うた8項目全体を見ると、全ての項目について、8割以上の学生からコミュニケーション能力が向上したという評価を得ており、一定の効果を得ることが出来ていたと考えられる。今回、その中でも、3群の間でばらつきのある「聴く力」「発

言する力」「自己の傾向がわかった」について、また、3群共に低い傾向を示した「表現する力」について考察していく。

「聴く力」について、「講義の体験」と「講義と実習の体験」群に比べ、「初めての体験」群だけが低い結果となった。これは、「初めての体験」群は、実習カンファレンスの場で初めてラベルワークという技法に出会い、手順に沿って一つずつ進めていく段階から始まった学生達であった。そのため、実習カンファレンスを行っていく中で、初めてであるラベルワークの手法や手順を追うことに最も集中し、相手の話を聴くということに集中できていなかったのではないかと考えた。それに対して「講義の体験」と「講義と実習の体験」群では、講義等での数回にわたるラベルワーク体験を有しており、ラベルワークの手順はもとより、ラベルワーク自体のイメージが既に備わっていたため、より「聴く」ということに集中できたのだと考えられた。

「自分の傾向がわかった」については、「講義と実習の体験」群、「講義の体験」群、「初め

での体験」群の順に高い結果となった。これは、「聴く力」で述べたように、ここでも同様のことがいえると考ええる。ラベルワークの体験が増すに従い、その手法についての理解度も増していく。手法を理解できている分、ラベルワークをしながら、自己のコミュニケーション傾向について意識を向けることができ、より傾向に気付くことができたのではないかと考える。「聴く力」「自分の傾向がわかった」について、ラベルワークの体験を重ねていくことで、評価が向上している。今後は、ラベルワークの意義を理解した上での、実習だけではなく、講義段階からの意図的な活用が大切であると考ええる。

「発言する力」について、「初めての体験」群は96.4%と高く、次いで「講義の体験」群、「講義と実習の体験」群の順に下がっている。これは、ラベルワークの経験を重ねるごとに、発言するという事の意味の深まりが生じ、学生の捉え方が変化してきたのではないかと考える。ラベルワークについて、「講義の体験」と「講義と実習の体験」群については、今回の実習カンファレンスでの取り組みだけでなく、学内での講義や演習においてもラベルワークを体験してきた。そして、その都度、ラベルを使って思いを伝えることや、自分の考えをまとめて書くこと、相手の話を聴きながら相手の言わんとすることを理解することなど、ラベルワーク技法の特徴を伝えてきた。この様な働きかけが影響し、「発言する力」への認識が、ただ話せばいいという考えから、相手に伝わるように話すという意識が深まり、学生の「発言する力」についての評価基準が厳しくなっていたのではないかと考える。この厳しい捉え方の状態で、継続したトレーニングの機会があれば、「発言する力」の向上につながるのではないかと考える。

「表現する力」については、3群共に低い結果となった。これは、ラベルワークの経験度など背景による違いではなく、「表現する力」の育成方法についての問題であると考えた。「聴く力」や「考えをまとめる力」ともまた違い、「表現する力」は、自らが意識し意図的にトレーニングして初めて力となるのではないかと考える。山川らが行っている、自他を尊重した自己表現力を養うアサーティブトレーニングへの取

り組みについての報告でも、3年間の基礎教育期間をかけて段階的に能力が高まることを目指している（山川ら、2006）。今回の我々の取り組みのように、1日1時間の8日間、つまり8時間のトレーニングでは、「表現する力」の能力がついたというほどの実感を得るには限界があったのではないかと考える。また、表現する能力を身に付けるには一朝一夕ではなく、表現力のトレーニングであることを意識した長期的・段階的な取り組みが必要であることがいえる。そのため、今後、学内での講義や他実習との連携も視野に入れた、継続した取り組みが必要且つ有効であると考ええる。

Ⅵ. ま と め

コミュニケーション能力についての8項目を設定し調査した結果、全ての項目において8割以上の学生が「向上した」と自己評価していた。このことから、本取り組みは、コミュニケーション能力の成長を促すのに効果があったと評価できる。

「聴く力」「自分の傾向を知る」は、ラベルワークを活用した実習カンファレンスが、コミュニケーション能力育成トレーニングの場であることを意識していくことで、短期間でも高めることが可能である。しかし、「表現する力」については、短期間での習得は難しく、長期的且つ段階的なトレーニングを要することが必要であると考えられた。

今後は、実習カンファレンスだけでなく、意図的な講義への導入やその繰り返し、他実習との連携した取り組みなど、継続したトレーニングを実施していける方法を検討していく必要がある。

本研究は島根県立看護短期大学の平成17年度及び18年度の特別研究費によって行い、その概要を日本看護研究学会中国四国地方会第20回学術集会において発表した。今回は発表した内容をさらに分析し加筆、修正したものである。

文 献

- 林義樹 (1994) : 学生参画授業論—人間らしい「学びの場づくり」の理論と方法—, 学文社, 東京.
- 林義樹 (2002) : 参画教育と参画理論—人間らしい『まなび』と『くらし』の探求—, 学文社, 東京.
- 林義樹, 金城祥教編 (2004) : 看護の知を紡ぐラベルワーク技法—参画型看護教育の理論

と実践, 精神看護出版, 東京.

- 石橋照子, 飯塚桃子, 林義樹 (2006) : 看護学生に確かなコミュニケーション能力を—ラベル交流と拡大図解の併用法—, 看護展望, 31(6), 92-97.
- 山川由加, 森山幸子, 明田朋子, 田代マツコ, 重年清香, 三輪田隆子 (2006) : 看護学生のアサーティブトレーニングへの取り組み, 大阪医科大学附属看護専門学校紀要, 12, 9-15.

An Approach to Communication Skill Training Using Label Work Technique

Momoko ITSUKA and Teruko ISHIBASHI

Key Words and Phrases: label work technique, communication skill, practical conference, nursing students

